

# 「YAWARA！」

浦沢直樹 作

(1986～1993 ビッグコミックスピリッツ掲載)

紹介者：榎本博康

## [紹介]

猪熊柔は普通の高校3年生、ではなくて実は祖父の猪熊滋悟郎の秘密特訓を受けた、柔道の天才である。それが、路上でひったくり犯を見事な巴投げでしとめてしまい、スポーツ新聞記者の松田が目撃。普通の女の子でありたい柔の気持ちとは離れて、滋悟郎が柔を売り出そうとする仕掛も利いて、世間の目にさらされて行く。

柔は普通の女の子になりたいと、柔道と無関係の三葉女子短大に進むが、ソウルオリンピックでは無差別級で優勝。友人達が三葉女子短大に柔道部を設立、柔道の楽しさを分かり始める。卒業前にはユーゴでの世界選手権で四十八キログラム級優勝。

柔道と無関係の鶴亀トラベルに就職。全日本選手権に優勝。しかし柔道続けることに悩み続けていた柔は、とうとう体重別選手権を棄権し、連勝記録を自ら絶ってしまう。

松田の懇願のかいもあって、柔は復活を決意、バルセロナを目指し、猛練習を始める。一年間のブランクの後、全日本体重別選手権四十八キログラム級で優勝し、バルセロナの切符を手にする。しかし、その四十八キログラム級決勝戦の相手はフランスのマルソー、父虎滋郎がコーチした選手であり、父と祖父の代理対決でもあったが、柔が勝つ。そして恋の悩みに揺れながらも、バルセロナの無差別級の決勝に向かう。



全29巻中、28巻の表紙を選んだ

## [感想]

柔道の田村亮子選手のシドニーオリンピックの金メダルシーンを何回も見ているうちに、本書をとりあげないわけにいかないと思った。もちろんマラソンの高橋尚子の金メダルの方が、ランナーとしては印象深いですが、彼女のニックネームであるQちゃんから連想するオバQや、倉橋由美子のスマキストQからはちょっと展開が思いつかなかったので。

柔の話は「自分探し」である。このように天才でも悩む。まして、僕ら凡人が悩まずにはいられようか。

猪熊柔は祖父に柔道の天才教育を受けるが、それを否定し、普通の女の子を夢見る。しかし「普通」とは何だろうか。日本では学校教育で、普通の人間になることを求められ、一方その延長での個性を求められる。柔は全く反対で、既に十分に世界的な個性があるのだが、没個性を求める。言ってしまうえば天才の贅沢な悩みかもしれないが、柔道は幼児から仕込まれたものであり、柔が自ら模索して得たものではない。高校生の彼女は自分を自分の考えで求めようと

考える。そのような自立の志向は、至極当然のことだ。そうでなければ、柔の柔道は良く調教されたポリショイサーカスの動物芸と何ら変わるところがない。

柔道は柔の大きな属性であり、「柔道の柔」に日本の、そして世界のライバル達が集まってきて、彼女との対戦を望む。それは最高の技を持った者達だけに許される、もっとも贅沢な交流である。そして、柔のライバルと呼ばれるに足る選手達は、十分に個性的であり、魅力的である。

超々財閥の令嬢、本阿弥さやかは強烈なライバル心で練習し、柔に挑む。同年齢の彼女もまた、家の財力を活用しながらも、本阿弥家の令嬢というだけではない、いや家が巨大であればあるほど、それを越える自分自身の姿を求めて戦う。金持ちのいやみを多く見せながらも、さやかの姿勢はまっすぐだ。

ソ連のテレシコワは、試合での対戦だけの間柄ながら、柔の技に心踊るものを感じる。ソ連の崩壊で、生きるために日本での柔道コーチの道を歩もうとするが、あえて柔を訪問し、生活は苦しくとも、やはり現役として訓練し、柔とのオリンピックでの対戦に夢をかける生き方を選び帰国する。

カナダのジュディは、柔の家に弟子入りをして学ぼうとする。とてつもない巨漢(女性にもこの言葉は使えるのか?)であり、柔との対決は無差別級柔道の醍醐味である。温厚な人間性と、試合で見せる厳しさ。ジュディもまた、柔を通じて自分の夢を追い求める。

その、柔はなかなか自分を見つけられない。でも、旅行会社に就職しても、出張先の早朝にランニングや柔道の基本練習を欠かさない。先に述べた一年のブランク後の復活も、マンガのコマは早朝に走る姿であり、その決意を読者に示す。走り続けている限り、柔は柔であり、読者は安心する。柔にとって走ることは、彼女の柔道家としての原点である。実は以前に、学生時代に柔道をやっていた女性が私の職場に配属された。田村以上に柔ちゃんそっくりの俊英である。その時は既にほっそりしていたが、現役の頃の写真では筋肉質で太っていた。全く止めてしまっただけは、天才といえども身体を維持できない。柔のランニングはその基礎にある。

浦沢直樹の素晴らしい初期作品だ。特に柔が得意の一本背負いを決める絵は、柔道の醍醐味を余すことなく表現し、思わず喝采してしまう。その後の浦沢作品は、「マスターキートン」や「モンスター」など、マンガの表現力を一段と深めようとしている。

(初稿2000. 10. 15)

#### [リバイバル感想]

大谷翔平選手がMLB (米国大リーグ野球) のオールスター戦に先発投手兼DH (指名打者) で出場した。彼の二刀流はたびたび、漫画でもありえない姿と形容されている。

このYAWARA! も、当時の私は漫画の世界として読んでいた。それでも当時の48キロ級は田村 (現、谷) 亮子で破竹の勢い、田村のニックネームもヤワラちゃんであった。田村のオリンピックでの成績は、1992年バルセロナが銀、1996年アトランタが銀、2000年シドニーが金、2004年アテネが金という素晴らしい成績である。これだけでも十分に漫画の世界と言えるだろう。

でも現実を超えなければ漫画では無い。漫画の柔はさらに無差別級の決勝に向かう。この

無差別級こそが柔道の理想の戦いの場であり、48キロ級の柔が挑むというロマンである。大谷翔平の二刀流はMLBで、そして広範なファンに認められた。とすれば48キロ級の選手が無差別級に挑むという姿だって、もしかすると見られるかもしれない。夢が膨らむ。

直近の東京オリンピックの48キロ級代表は渡名喜風南（となきふうな）選手、頑張れ。

(2021. 7. 15)

渡名喜選手、銀メダルおめでとうございます。全ての試合が素晴らしかった。

(2021. 7. 24)